
変革の遊戯(ゲーム)

こぬか雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変革の遊戯^{ゲーム}

【Nコード】

N8622F

【作者名】

こぬか雨

【あらすじ】

神崎海音には、読んだものを具現化する力がある。その力が与えられた本当の理由とは――――



「『家庭で簡単に出来る悪魔召喚』？ 何この軽いノリ……」

図書委員長——とかむしろ図書館の主である神崎海音は、新かんざきうみねしく入荷した本に透明なフィルムをかけながら呟いた。

「悪魔召喚ってのは何日も風呂に入らない汚れた体で、山奥の誰もいないところで聖遺物とか使ってやるもんでしようよ……」

しかも月齢にも気を配らなければならぬのだ。家庭で簡単に出来たら、あんな苦労は——しかし、やはり気になるらしく、銀縁の眼鏡をかけてから本を開いた。

海音は本を読むのが速い。それはテレビでよく放送されているような、もはや超能力に近い速読ではなく、一字一字をしつかりと追いつながら、それでもなお速いのである。海音が本を読み始めてから約十分——すでに、三十ページを読み終わっていた。

しかし、海音は手を止めざるを得なくなってしまった。図書館に吹く風が変わってしまったのだ。思わず舌打ちをする。

けたけたと、笑い声が放課後の図書館に響く。同時に本の表紙に目が開いた。

「今気持ち悪いとか、思っただろ」

「まあね」

本から発される声に、海音が短く答える。その瞬間、図書館中の本が海音に向かって飛んできた。

海音はカウンターに隠れながら、ポケットにしまっていた小さなノートに目を通す。

「お前の魂、よこせ———！」

「うるさい！ 私の読書の邪魔をする奴にあげる魂なんかない！」
ノートのページを恐ろしいまでの速さでめくっていく。そこに書

かれた文字を海音は読んでいるのだ。そして最後の一文字を読み終わった瞬間――

図書館は、漆のような闇に染まった。

「――我は来たり、御身の元に。……望みは何だ、神崎海音」

ばさりと音を立てて、一人の男が海音の前に降り立った。黒い羽根が空に舞う。金の髪に鈍色の金属じみた瞳――普通の人間ならば竦み上がってしまうような異様な男に対し、海音は全く怯まずに言った。

「私の読書を邪魔したアイツを倒して」

「――お前の望みはいつもそれだな」

男は苦笑して、無造作に手を伸ばした。掌に光が集まる。海音はそんな男を無視し、再び本を読み始めた。男は言う。

「吾は万魔殿の主。神に背き闇を照らす明星なり。悪魔ユリウスよ、直ちに闇へ歸りたまえ」

本に憑いていた悪魔はユリウスというらしい。海音は頷きながら、再び活字に眼を落とした。男に任せておけば安心だ。何せ彼は万魔殿の主たる堕天使ルチフェルなのだから。

不意に、ルチフェルが海音に向き直った。海音は本から視線を外すことなく、ルチフェルに「終わったのか」と聞く。

「終わった」

「じゃあ向こうに戻ったらアイツ袋だたきにしておいて。私の読書の邪魔をするとうなるって、他の奴へ教えてあげるためにもね」

「――海音。あれがお前の読書を邪魔しているのではなく、お前の読書があれを喚んでいるんだ……って、何故私にカッターを向けているんだ？」

「私は本を読んでいるのよ。そこに座ってあと三十分待ってなさい。呼吸もしないで、気が散るから」



海音は無茶苦茶だ……心の中で溜息をつきながら、万魔殿の王たるルチフェルは息を止めていた。人間ではないのだから、この程度で死んだりはしない。むしろ今は、息をしたら死んでしまう。海音は厄介な力を持っていて、だからこそルチフェルなど簡単に滅し得るのだ。

海音は、読んだものを具現化する力を持つ。例えば「聖遺物を用意する」という言葉を読んだだけで、まるで神のように聖遺物を作り出してしまうのだ。もちろんその厄介な能力は、普段は制御されている。しかし読書中は制御を忘れ、さっきのように読むだけで魔物を召喚してしまったりする。

（あれが神の子の力か……）

かつてルチフェルが反逆した神は、再び地上に子を遣わした。しかしその子である海音は、力を持て余しているのが現状だ。二千年以上前の子供——つまり救世主イエスとは全く違う。

まして遣わした子供が、神の子であることを自覚せずにルチフェルを使役していてもお咎め無しだ。確かに悪いことには使っていないとか、読書の結果起きたトラブルの後始末をさせることがほとんどだから問題はないのかもしれないが。神の意図は全く読めない。

（あれの考えていることは本当にわからないな——）

造物主に作られたものが、造物主を理解するのは不可能なのかもしれない。だがルチフェルはかつて彼を理解しようとしたし、今もそうしようとしている。それで過去に失敗し、地に落とされても変わりはないのだ。

（海音はまだ、理解出来るけどな……）

海音は人間に近い。というかそのものだ。確かに曲がったことが嫌いで、潔白な心を持っているが、書物に対しては貪欲過ぎるくらいに貪欲である。ただ奇妙な力を得てしまっただけの人間のようにも思えるのだった。

ルチフェルが考えを巡らしていると、海音が言った。

「息していいよ、もう読み終わったから」

「――そうか」

久しぶりに呼吸をすると、本の静謐な香が鼻腔を擦った。^{くすぐ}ルチフェルは機械にも似た鈍色の眼を細める。

「ルチフェル、肩揉んで」

「……御意」

神の子は横暴だ。悪魔の王に肩揉みをさせてしまうのだから。確かに大物なのかもしれない。また新しい本を読み始めているところにも大物の気配が漂う。

「もうちょい右。……そう、その辺よ」

悪魔が神の子の肩を揉む。考えれば考えるほど変な光景だ。ルチフェルは耐え切れずに、海音に聞く。

「他の願いはないのか？　――金が欲しいとか」

「とりあえず今は困ってない」

「恋人が欲しいとか」

「まだ早い」

「本が欲しいとか」

「欲しいけど、自分で選びたいし」

「誰か殺したいとか」

「読書の邪魔をするアンタを殺したい」

そう言いながらも、海音は力を使おうとはしない。海音の持つノートには、ルチフェルを召喚する文章、退去させる文章、そして殺す文章が書かれている。だがそれを使わないということは、少なくとも本気で嫌われているわけではないということだ。

「――海音」

「何？」

「何故お前は読書にこだわる？　読まなければ、厄介なことに巻き込まれることもない」

「ん――」

海音は思案しながら、読んでいた本に栞を挟んだ。

「――私はこの世界に飽いているんだよ」

本は人を異世界に誘う。普通は出来ないことも、本の中なら可能だ。本来一度しか体験出来ない死ですら、体験することが出来る。

だが世界に飽いている、というのは問題だった。

「何故、世界に飽いている？ お前はまだ十七年しか生きていないはずだ」

「悪魔のくせに正論言わないでよ」

「正確には堕天使だ」

「似たようなもんだよ。――そうだね、確かに私は十七年しか生きていない。だけど……今の世の中、人間はがんじがらめに縛られていることはわかるよ」

人は本来自由な生き物だ。堕ちることも、懺悔ざんげによって聖なる道へ向かうことも出来る。しかし確かに今の人間は、神や悪魔以外のものに縛られているのかもしれない。かつては悪の道に堕ちても、悔い改めれば少しは救いがあった。造物主はそのくらいには自由を与えていた。もちろん改めない者にはひどい罰を与えていたが。しかし今はどうだろう。人は一瞬たりとも道を踏み外すことは出来ない。

道を踏み外した人間を罰するのは人間自身――所謂、社会的制裁というやつだ。

「――私の両親は、私が本を読むのを未だに快く思っていないの。

『小説家を目指すのはやめるし、小説は二度と書かない』って約束したのに」

本好きが高じて、小説を書く人間は少なくない。ことに海音は真面目な人間であるから、小説家になりたいと本気で考えたに違いはない。そして海音の両親は、小説家として成功できるのは一握りだということを知っていて、堅実な職業に就くことを海音に強要した。そんなところだろう。

「本の中なら、小説家にだってなれるでしょ？ 読書は道を踏み外さずに人生を謳歌する知恵よ」

「――道を踏み外した私にはわかりかねるな」

「天使って人間より厳しいわよね。一度齒向かったら墮天使だもん」

「人間は地に降り立って久しい。造物主が最初に作った土人形とはいささか違った存在になりつつある。だから神は悔い改めれば人を赦すんだ。――それに、私が神に齒向かったのは一度だけではない」

玉座を奪おうとしたのは一度だけ。だが、二度目の反逆は――
「女をそそのかした蛇は、私なんだよ」
エヴァ

「――何のために？ その頃貴方は既に堕ちた存在だったはず」

「あれを食べれば、土人形でも少しは神を理解できるかもしれない――あの方は私がいなくなって孤独に違いないと、思いつきもはなはだしいことを思っていたのさ。だが人間も遂には神を理解できなかった。そして理解されない孤独を神は受け入れていた」

海音は黙って話を聞いていたが、しばらくして呟くように言った。

「本当は、神を裏切るつもりはなかったのね？」

「ああ。――だが確かに思いついていたよ」

「思いつく、ね。私が世界に飽いているのも、神にしてみたら思いついた感情なのかもしれないわね」

神の子は神の意志のままに動かされる駒だ。彼は玉座から動くことが出来ないために、そうやって御使いを派遣した。ならば海音の感情もまた神の意志によるものなのか。ルチフェルは頭を抱えなくなった。

やはり、理解には程遠い。

「――ルチフェル、手が止まってる」

「……ああ、すまない」

そういえば肩を揉んでいたのだった。ルチフェル再び海音の肩に手を乗せる。彼女は眼精疲労からか、わりと肩が凝っているのだ。

「……あー、そこそこ」

筋肉が凝っているところくらいは、自分の力でアタリをつけることが出来る。だがいささかくだらしない気もする。もっともそのくらいが平和でいいのかもしれないが。

「――海音」

「何？」

「本当は、お前を縛る鎖から解放されたいんじゃないのか？」
後始末や肩揉みなどではなく、それが望みではないのかと問う。
海音は笑った。

「――でも、望んでいいことといけなことがあるでしょ」

「私はどんな汚れた望みも否定しない。お前の魂と引き換えにすれば、どんな望みも叶えよう」

「そんなに私の魂が欲しいの？ そりゃそうよね……肩揉みで魂持つていけるわけないか」

「本音を言くと、そういうことだな。私はお前の魂が欲しい」

「――それは彼女が、神の子だから。」

だが本当に彼女が神の子なら、願うことはしないだろう。それもわかつている。

「――でも私を縛る鎖が、世界を保っているのよ。だからその軛くびきから外れるわけにはいかないの」

「本があれば、軛から外れることなしに軛から外れられるだろうしな。確かに私は必要ない」

世界を保とうとするところには、確かに神らしさを感じる。だがそれ以上に、海音自身の欲望も感じるのだ。

ルチフェルは笑う。神の意志がようやく見えたのだ。

（世界に飽いているのは、神なのか……）

海音の感情に見せかけた神の意志は残酷だ。神は遊んでいるのだろう。

「――それなら、反逆者である自分はその遊戯ゲームを破壊しよう。

世界に飽いた海音はいずれ、世界を変革する。それだけの力はあるし、第一自分を喚び出した時点でそれを実行することは出来るだろう。

そう、海音はいつか本の世界を体現したいと思うようになる。
それならその前に、道を踏み外させてしまえばいい。誘惑し魔動

に落とす——それは万魔殿の主として、当然の行為なのだから。
ルチフェルは冷たい笑みを浮かべた。

「——本という擬似体験だけでは物足りなくならないか？」

「——え？」

ルチフェルの問いに、海音は戸惑ったような声を上げた。

「本で満たされるのは視覚のみだ」

耳元で囁き、聴覚を揺り動かす。

「——いや、視覚すらまやかした。本当に何かを見ているわけではない」

ルチフェルはそのまま右の耳に舌を差し込み、触覚を呼び覚ます。
海音の肩が震え、僅かに甘い吐息が漏れた。案外敏感なようだ。

そのまま音を立てて耳を舐める。聴覚と触覚から海音を——神の子を犯していく。

「……や、だ……ルチフェル……っ！」

「——想像は現実にはしないよ」

まるで飴を溶かしていくように海音の耳に舌を這わせる。執拗なその行為に、海音の息が荒くなり始めた。

「や……、あつ……い……」

「熱も快楽も羞恥も、実際に肌で感じるもののほうが勝っているものだ」

溺れてしまえばいい。浅ましい、人の動物としての快楽に。そして神の遊戯など壊し、欲望のままに生きてしまえばいい。子だからと言って、父に従って生きて死んでいく必要などない。この世に産み落とされた時点で人は独りの自由な存在なのだから。

「体が……変……」

海音の甘く溶けそうな声。ルチフェルは己の欲望が胸に灯るのを静かに感じた。

「海音……キスしていいか？」

「ん……」

もう思考すらままならないのだろう。抵抗はなかった。ルチフェ

ルは優しく海音の唇を奪う。僅かに開いた唇から舌を滑り込ませ、口内を味わい尽くした。同時に、海音の腰が抜ける。唇を離すと、銀糸が二人を繋いだ。

「もつと……」

「貪欲だな」

「悪魔に言われたくない……」

人は快楽に弱い。だからこそそれを乗り越えて聖の道を辿るものは尊いのだが。ルチフェルは口角を吊り上げ、再び海音と唇を合わせた。

——しかしその瞬間、まばゆい光がルチフェルの世界を裂いた。

《邪魔をするな。——反逆者ルチフェルよ》

ルチフェルの脳内に声が響き、頭が割れそうになる。

「く、っ……!」

「ルチフェル!? どうかしたの!？」

キスをしようとしていたために、自然、海音に支えられる形になる。しかしそれは逆効果だ。ルチフェルを苦しめているのは、彼女の中にある神の意志なのだから。

神の意志は、主の声は、冷たくルチフェルに言う。

《私の娘をこれ以上壊さないでもらおうか》

「娘? 『駒』の間違いだろ……っ!」

「ルチフェル? 誰と、話しているの?」

海音の心と神の意志は分裂する。海音の心配する声をよそに、神による『罰』——つまり侵蝕が始まった。

「くっ……あ……!」

早く海音から離れなければ。しかし心配する海音は、逆にルチフェルを抱き寄せる。

『罰』の苦痛は三度目だ——。白くなる意識の底で、ルチフ

エルは思った。そしてこの苦痛こそが、自分が神の創造物でしかないことを思い出させる。ルチフェルは唇を噛んだ。

《――造り物風情が》

「なら何故私に知恵や感情を与えた！」

感情さえなければ、知恵さえなければ――逆らうことなど、ないのに。

《私のことなどお前には理解できない》

「くっ……！」

意識が塗り潰されていく。それはエクスタシーの瞬間のように甘く激しく、雷に貫かれるように苦痛を伴う。

支配される。抵抗する。そしてそれを上回る支配――螺旋のように続いていく。

ルチフェルは翻弄された。罰を与える神と、そうとは知らずに心配するような目を向ける海音との間で。

どちらが神の本当の姿なのか。

意識が遠退く。その中で、海音がノートを取り出すのをルチフェルは見た気がした。

――気がつくところには、自分の本来いるべき場所、つまりは地の国だった。

ルチフェルは深い黒の光沢のある玉座にもたれ掛かる。苦痛は未だに全身に残っていたが、助けてくれたのは海音だとわかった。おそらく強制退去の文章を読んだのだろう。彼女の機転に感謝しなければならぬ。

「ルチフェル様！」

「……ああ、ユリウスか。どうかしたのか？」

「いいえ、その……体の具合がよろしくないのですしたら、我が魔力をお使いください——」

つまり魔力によって、未だに体に根を張る神の罰を壊そうというのだ。ユリウスは自分と同じように墮天使であるから、そのくらいは簡単だろう。ルチフェルは静かに頷いた。

「悪いな。頼むよ」

「では、失礼します」

ユリウスの手が額に触れると、僅かに体が楽になる。ルチフェルはまどろむように目を細めた。

「——今日はすいませんでした。お手を煩わせてしまつて……」

「あれは不可抗力だ。仕方あるまい。それに海音も慣れてきたからな……全く問題はない」

「ですが、俺が呼び出されたりしなければこんな目には……」

「これは私が蒔いた種だよ。気にすることはない」

ユリウスの律義なところは、さすが元天使といったところか。この世界で生まれた最近の魔物ときたら、主である自分に敬語を使うことすらしないのだ。まるで神に対しての人間のような。ルチフェルは苦笑を浮かべる。

「——ところで、ルチフェル様。あの娘はどうしますか？」

「海音のことか？——ユリウスはどうしたい？」

「神は——造物主は世界を変革しようとしています。それは我々にとつていずれ大きな問題となりましょう。もちろん、あの娘がどんな変革を望むかにもよりますが」

「そうだな……まあ、暫くは様子を伺うしかなさそうだ」

海音が神の思い通りの変革を望んでしまうのか、それとも違うのか——やることはやった。だから暫くはただ、見守るしかないのだ。ルチフェルは溜息をついて、鈍色の双眸を閉じた。



「ルチフェル……」

海音は読んでいたノートを閉じて、溜息をついた。何が起こったのかはわからなかったが、とりあえず魔界に帰してしまえばどうにでもなるだろう。

「一体何が……？」

わからなかった。他の人間——かどうかはわからないが——と会話をしていたのはわかる。その中でいくつかの単語が引っ掛かっていた。

『娘』、そして『知恵と感情を与えた』という言葉——ルチフェルに何かを与えられる存在など、神しかない。つまりルチフェルは神と会話をし、神に苦しめられていた。それはわかる。

だが『娘』とは何だろうか。海音は顎に手を当てて考え始めた。

——しかし、急に意識が白くなる。

《ルチフェルめ。邪魔をしおって……》

誰かの声が聞こえ、誰かの手が海音の額に触れた。

《忘れてしまうといい。私の愛しい娘よ》

誰かの手が光を放ち、何かが奪われていく。それが怖いと、海音は思った。

「取らないで……お願い……」

《穢^{けが}れは浄めなければ。そしてあの出来損ないのことなど忘れてしまえ》

「『出来損ない』……？」

それがルチフェルのことであることは、何となく理解が出来た。

海音は呟くように言う。

「ルチフェルは出来損ないなんかじゃない……貴方を想っているんだよ、神様」

《——お前は何も知らなくていい》

神の意識が浸透していく。穏やかに甘く、しかしそれは確かに支

配であり鎖なのだ。海音の心は軋んだ。

「……奪わないで……忘れたくない……私の心は全て、私のものの……！」

歪んだ欲望も、貪欲さも、神に連なる道徳的な理性も全て受け入れてほしい。それなのに神は、ルチフェルとの記憶も、体に残る甘やかな熱情も全て奪い去ってしまう。

「い、や……」



神の意志は海音の全てを覆い尽くし、やがて何事もなかったかのように消えた。

ただそこに残ったのは、何も知らない海音と、読みけの本と、真っ白なノートと———床に落ちた漆黒の羽根だけだった。

海音はその羽根を無造作に拾い上げ、ごみ箱に捨てようとして———

——その直前で手を止めた。

「綺麗な羽根だな……」

後で加工して栞にでもしよう。そう思いながら、海音はそれをポケットに入れた。

(後書き)

「悪魔か鬼か」、なのに堕天使で書いてしまいました（^ー^；
しかも何気にバッドエンド……色々とすいません……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8622f/>

変革の遊戯(ゲーム)

2010年10月8日15時11分発行